町民文芸

只見短歌会　令和四年八月詠草

吾が心明るくする如咲きさかる紫陽花のピンクひと時見入る　馬場　八智

捨て難く歳月過ぎし亡き母の日記に我が名ありて高ぶる　目黒　富子

他県にて一人住まいの同級生との話題はいつも中学時代　関谷登美子

花ぐもる玄関の屋根に雀二羽空を見地を見はやも飛び立つ　新国由紀子

一夜にて荒らせし跡ありトウキビを摘まむと早く畑に来れば　渡部ヨリ子

猛暑日の続く八月エアコンをつけて娘ら花を商ふ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　八月定例会

日高俊平太　指導

八月や父のつぶやき今になお　恒夫

カンカン帽しずかな父の語り口　一穂

コロナ禍や十口の我慢百日紅　睦子

幼児は同じ本好き昼寝時　修一

不安げに巻きひげ伸ばす胡瓜かな　紺青

炎天や配達員のバイク音　信

幾年ぞ人なき峠の渡り鳥　礼

語り継ぐ白河の関甲子園　都

我が町もコロナが宿る盆の月

散歩する我が道遠く一万歩

芋の絽祖母の好みを受け継ぎて

天上の蓮咲きこぼれ御薬園

満点の星を田の面に蛍の夜

それぞれの思いにふける蛍の夜

水遊び髪のおだんご高くして

夏暁や地面すれすれ鍬を引く